悪役令嬢はヒロインを虐めている場合ではない２

四宮あか
Aka Shinomiya

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介
フォルト
レーナのはとこ。
ツンデレで世話焼き。
甘い物に目がない。
シオン
攻略対象の一人。
教会の元神官で、レーナと
血の盟約を結んでいる。
可愛い外見に反してドS。
リオン
レーナの休暇先で
ダンスを教えることに
なった先生。なにやら
秘密があるようで……
ジーク
レーナの婚約者で
公爵家子息。事なかれ主義で、
当初はレーナの顔すら
覚えていなかった。
氷の魔法を自在に操る。
ミリー
レーナの取り巻きの一人。
おっとりした性格。時々
ものすごい失言をする。
アンナ
レーナの取り巻きの一人。
抜群のスタイルの持ち主。
しっかり者で少し心配性。
レーナ
自由奔放でガッツのある悪役令嬢。
魔力量と学力は少々低め。
転生先の乙女ゲーム世界で
自由に生きることをモットーにしている。

目次

悪役令嬢はヒロインを虐めている場合ではない２　7
書き下ろし番外編
友達になった僕達　341

悪役令嬢はヒロインを虐めている場合ではない２

プロローグ

悪役令嬢に転生する物語のお約束といえば『断罪』。

どうして突然、私がこんなことを言っているのかといいますと……

なにを隠そうこの私――遥(はるか)が、『王立魔法学園』を舞台にした乙女ゲームの悪役令嬢『レーナ』、現在十三歳⁉　になってしまったからであります。

つり目がちな緑色の瞳と、金髪縦ロールがトレードマークの公爵令嬢レーナ・アーヴァイン。そんな彼女には、銀髪碧眼の、目を奪われるような美貌を持つジークという婚約者がいた。

クラエス公爵家の嫡男(ちゃくなん)で、なんでもそつなくこなせてしまう彼に、ゲームの中のレーナは夢中だった。

だが、夢中になりすぎてしまったために、彼に近づくゲームヒロインを虐めまくり、挙句(あげく)の果てにジークの手によって社交界を追放されてしまうのだ。

せっかく転生したんだし、断罪なんてまっぴらごめん！

『ジークには関わらず、お嬢さまとして楽しく生きる』をモットーに、ヒロインとジークを避けていたのだけれど……

攻略対象の一人、はとこのフォルトに嫌味を言われたり、もう一人の攻略対象である神官・シオンと森の中で恐怖の鬼ごっこをしたりと、楽しいお嬢さま生活とはほぼ無縁。

さらには、学園に侵入していた教会の治癒師・グスタフに殺されかけ……私が掲げたモットーとは真逆の異世界生活を送っているのだった。

でも、夏休みの間はそんな波乱万丈の日々を忘れられる。

というのも、王立魔法学園には、遠くから来ている生徒が一度領地に戻れるようにちゃーーんと長い夏休みがあるのだ。

ゲームではヒロインも攻略対象も、夏休みの間は学園都市に留まる。

まぁ、『攻略対象者全員が夏休みの間、自分の家に帰りました。学園にはヒロインだけです！』ってことになったら、乙女ゲームとして成立しないから当然ではある。

理由はなんであれ、主要メンバーが学園に残ってくれることは私にとって好都合。

学園に残らなければ、ヒロインも攻略対象達もレーナに絡みようがない。

つまり、私が自分の実家であるアンバー領に帰れば、彼らを避けることに神経をすり

減らす必要もないし、厄介事に巻き込まれる心配もなくなる。
領地に帰ったら、レーナの取り巻き兼友人のアンナとミリーとショッピングをしたり、観劇したり、美味しいものを食べたり……今度こそお嬢さまとして夏休みを最大限に楽しむんだから!!
皆。グッバイ、アディオス!
待っていてね、私の夏休み……いや、バカンス!

一　バカンスを楽しんでいる場合ではない

夏休み初日の早朝。私はレーナの実家があるアンバー領へと、アンナ、ミリーとともに馬車に揺られて向かっていた。
学園都市をぐるりと取り囲む城壁はあっという間に見えなくなり、私達を乗せた馬車は護衛に守られながらアンバー領へ続く街道を進む。
馬車の椅子はふかふかでお尻は痛くならないし、簡易なテーブルでお茶もできちゃうし、乗り心地はなかなか快適。

私はこれまで巻き込まれた厄介事をすっかり忘れて、アンナとミリーと楽しくおしゃべりに花を咲かせていた。
「レーナ様、このスコーンとっても美味しいですわ。どうぞ召し上がってください」
私がお菓子を食べ終えたことに気がついたミリーが、すばやく私にスコーンを勧めた。
ミリーは青いふんわりとした髪と、口元のほくろが可愛らしい女の子だ。いつもおっとりとした口調で話し、たまにうっかり失言することがあるけれど、基本は気遣いのできるとてもいい子だ。
「ええ、ありがとう。いただくわ」
私はミリーからスコーンを受け取り、テーブルの上に置かれていたクロテッドクリームをたっぷりつけて口に運んだ。その様子をミリーはニコニコしながら見つめる。
「レーナ様、スコーンにはこちらのお茶が合います。今ご用意いたしますね」
ハキハキとした調子で私に声をかけたのは、もう一人の取り巻きアンナだ。彼女はキリッとした目元と、赤いポニーテールが印象的な女の子で、スタイルは抜群である。
アンナは私に微笑むと、馬車の中ではあるけれど慣れた手つきでお茶を用意し始めた。
――なんて最高なのかしら。これよ!　こういうのよ!　私がしたかったことは。
美味しいお菓子とお茶をたしなみながら、この間のサマーパーティーでミリーとアン

ナがイケメンとダンスをした話を聞いて、三人で笑ったりするのがいいのよ。
腹黒のサイコキャラクターに追いかけ回されるとかではなく。
攫われて自力で塔から脱出する羽目になるとかでもなく。
生命の危機に直結するような事件に巻き込まれ『誰か私を助けて!!』って展開でもなく。
私はただ、普通に楽しく過ごしたいだけなのよ！
いけない。ついつい、心の声が大きくなってしまった……
レーナに転生してからというもの、もうホント勘弁してくださいの連続だった。
我ながらツイていないと思うが、そんな生活とはもうおさらばよ。
攻略対象達が集まる学園都市から離れれば、もう誰も私を厄介事に巻き込めまい。
ご学友との楽しいおしゃべりと、美味しいお菓子にお茶。私の夏休み、幸先がいい。
「夜の色を閉じ込めたような藍色の瞳がとても素敵で。ダンスの間、その瞳で見つめられていると考えたら、私緊張してしまって」
ミリーはダンスを踊った時のことを思い出して、うっとりとした表情でため息を吐いた。
「私も素敵な男性を見かけて、ぜひ一緒に踊りたかったのですが……叶わなくて……」
アンナもミリーに続いて、サマーパーティーで見つけたイケメンの話をする。しかし

彼女は、ミリーのように目当てのイケメンと踊ることはできなかったらしい。口惜しげに唇を噛んだ。
「そんなに素敵な方でしたの？」
やっぱり乙女ゲームだから、攻略対象以外にもイケメンがいたのかしら。
思わず私は食い気味に質問してしまう。
それに、アンナとミリーは真剣な顔で頷いた。
私、二人が絶賛するイケメン達を見逃した……
ダンスは踊れなくても、せめて顔だけでも拝見したかった。二人が太鼓判を押すくらいなのだから、相当イケメンだっただろうに。
サマーパーティーの時は、ジークのせいでイケメンを観察する余裕がなかったからなぁ。
あぁ……どうしてイケメンが会場にいないかチェックしなかったの？　と過去の自分を責めてももう遅い。
他にも、あの人はダンスもお上手だっただの、容姿はどうだっただの、どのタイプに分類されるイケメンかだの、見逃した私に詳細に話してくれた。
「ダンスという口実がなければ、あの距離に入ることはできませんでした」

ミリーがいつになく真剣な顔でそう言ったのを聞き、私は決意した。
――あぁ、ダンス踊れるようになろう。
決めた。絶対に夏休みの間にダンスを習得してみせるんだから!!
ダンスにかこつけて至近距離でイケメンを拝みたい……悪役令嬢でも、そのくらいは許されるはずよ。
次は私もジーク以外のイケメンと踊る、なんとしても！　と邪な気持ちから、別の野望が今誕生した。
馬車は途中で数度休憩を挟み、夕方には今日宿泊する街に到着した。
結局話が盛り上がりすぎた私達は、食事とお風呂が終わった後、私の部屋に再集結した。そして、夜通しおしゃべりをしてしまった。
そのせいで、二日目は馬車の中で、スプリングの利いたふかふかな椅子に全身を預け皆で爆睡だった。
だって、ふかふかなんだもの。普通寝ちゃうわよ。
結局次の日も宿に着いたら、今度はアンナの部屋に集まって、夜通しおしゃべりして翌日は馬車の中で爆睡。
馬車の休憩場所もちょっとした観光地だったし、宿の料理も美味しい。夜はオールで

おしゃべりしてって……楽しすぎる、まるで修学旅行のよう。
そんな風に、ワイワイしながら領地までの移動を楽しんでいた最後の夜、私達はミリーの部屋に集まっておしゃべりをしていた。
ベッドに寝そべりパジャマ姿で話し込んでいた時、寝室の扉がノックされた。
もう夜も遅く、就寝していてもおかしくない時間だ。
「どうぞ」
不思議に思いながら返事をすると、メイドがおずおずと顔を覗かせた。
「このような時間に申し訳ありません。実は、御者が緊急でお嬢さま方にご相談したいことがあると。寝室に招き入れるわけにはいきませんので、お手数ですがリビングにお越しいただけませんか？」
そう言われて、私達は顔を見合わせた後、羽織をかけるとリビングへと移動した。
リビングには御者の男性が帽子を抱え、緊張した面持ちで立っていた。
身分の高い私達を、使用人である自分が夜遅くにわざわざリビングに呼び寄せたのだ。処罰の可能性もあり得るがゆえに、顔色が悪い。
「お嬢さま方、このような時間に申し訳ございません。同じアンバー領に行かれる方の馬車の車輪が壊れたそうで……修理を試みたのですが、代わりの部品の目処が立たず」

あらー、馬車が壊れた人がいるんだ。ご愁傷様である。

「それで、あの。先方に、明日こちらの馬車に同乗できないかと相談されまして……。私一人ではとても判断できませんので、お嬢さま方のご意見を伺いたく。……いかがいたしましょう」

御者は手と声をぶるぶる震わせている。

私達の馬車は大きくて広い。本来六人程度は乗れるところを、三人でゆったりキャッキャッしているのだ。

アンナとミリーは、当然私の出方を窺った。

ん～、どうしよう。でも、普通であれば私達に話を持ってくる前に断るはず。ということは、相手は無下に断われない人物なのかもしれない。

「明日にはアンバー領に着くのですから、乗り合わせてもかまいませんわよ。ただ、あちらに着きましたら、とびっきり美味しいお店を教えてくださいませと伝えてちょうだい」

「かしこまりました」

御者は安心した様子で返事をして、そそくさとリビングを出ていく。

「一体どんな方なのかしら。レーナ様の馬車と知って、向こうは同乗をお願いされたわけですよね」

御者の姿が見えなくなると、アンナが首を傾げつつそう漏らした。

そうなのだ……私が乗っている馬車だとわかっていて頼める人物……って誰だろう。

「気になりますわ。それにしても……明日は馬車の中で眠れませんね」

ミリーはクスリと笑って、こちらに目線を向ける。

「ホント……今日は夜更かしできませんわね」

私はミリーに小さく笑みを返した。

それから私達はミリーの部屋に戻り、早々に一つのベッドの上で眠りについたのだった。

次の日。お世話になった宿を後にすると、馬車の前に、今日乗り合わせることになった相手が立っていたんだけど……

あぁ……

あぁ……

嘘でしょう……

私の目がおかしいのかな……。本来ならここに絶対いるはずのない、見覚えのある金

髪と黒髪の人物が……私ったら疲れているのかしら。
「ごきげんよう。レーナ嬢、アンナ嬢、ミリー嬢。今日は世話になる」
「おはようございます。レーナ様、アンナ様、ミリー様。本日は馬車に同乗させていただけるとのことで、大変助かりました。馬車の空きが当分ないらしくて、このままだと何日もここに滞在する羽目になるところでした」
そう言って、金髪と黒髪の人物――フォルトとシオンが私達に深々と頭を下げた。
どういうこと？　なんで？　攻略対象は夏休みの間、学園都市に留まるんじゃないの？
どうして二人が私の安息の地、アンバー領に来るのよ！
なにかの間違いじゃないの？　ああ、きっとそっくりさんだわ。
「まぁ、ごきげんよう。乗り合わせの相手は誰かと思えば、お二人でしたのね。シオン様、髪を切られました？」
アンナがニコニコと挨拶したことで、そっくりさん説は消えた。そういえば、シオンの目にかかっていた前髪がすっきりしている。
「ごきげんよう。とびっきり美味しいお店。楽しみにしておりますわね」
見知った人物だったこともあり、ミリーも二人に向かって気さくに笑う。

「レーナ様？」
アンナが挨拶をしない私に不思議そうな顔を向けた。
「ちょっと待って。どうして二人がこちらにいるのですか？」
「どうしてって……実家に帰るだけだが……」
フォルトは怪訝（けげん）な表情を浮かべながら私の質問に答える。
そりゃ、夏休みに自分の実家に帰るのはおかしいことじゃないけど。
「僕は、公爵様……っとレーナ様のお父様から、事件や教会のことで聞きたいことがあるからと招待を受けたんですよ～。髪は流石（さすが）に公爵様の前であれじゃまずいかなって、切っちゃった」
シオンはシオンで私の父からの招待……
レーナの中身が私と入れ替わり、いろいろあったことでシナリオが大幅に変わってしまっている⁉
フォルトは、公爵家直系の令嬢にもかかわらず、好きな男の後を追い回し、我が儘放題しているレーナのことをよく思っていなかった。
直系であるレーナが子供らしく遊び、恋に現（うつつ）を抜かす一方で、傍系のフォルトの両親は厳しい教育を彼に強いた。レーナが他領に嫁いだ後、フォルトはアンバー領の領主に

なる可能性があるからだ。
そこから生まれた不満が、レーナだけでなく両親にも向き、ゲームではアンバー領に夏休み帰らなかったのだろう。
ところが、婚約者であるジークから酷い扱いを受けようとも、自身が政略結婚の駒であることを理解し気丈に振る舞い、少ない魔力で懸命に努力するレーナの姿を見て、フォルトは考えを改めたようだ。
その結果、ゲームのように夏休み中実家に帰らない理由がフォルトになくなってしまった!?
神官として学園にいたシオンは、所属していた教会から抜けて私の下についたため、学園都市に残って治療を行い、お金を稼ぐ必要はない。
また、先日のグスタフ事件のせいで教会の規模はかなり縮小したらしく、シオンを引き戻すだけの力はもう残っていないだろうとのこと。
私がアンナとミリーと楽しい旅をしている間に、攻略対象二名が学園都市にいないという、とんでもない夏休みが始まっていたのだ。
ゲームでは絶対にあり得なかった展開になってしまっている！
どうなる……私のバカンス!?

「あの……レーナ様、そろそろ参りましょうか？」
アンナは、魂が抜けたみたいに呆けている私の顔色を窺いながら、馬車に乗るよう声をかける。私はコクリと頷いて、ふらふらとした足取りで馬車に乗り込んだ。
アンナ、私、ミリーの順に椅子に座る。その向かいには、フォルトとシオンが座った。
「フォルト様はてっきり学園に残られるものかと思っておりました」
アンナがそう切り出す。すると、フォルトが少し困った様子で口を開いた。
「学園であのような事件が起こって父も母も心配していたから、帰ることにしたんだ」
「シオン様はやはり公爵様と事件のことを話されるのですか？」
ミリーがおずおずとシオンに質問した。
「んー事件の報告もそうですが、僕はもう教会の神官じゃないので、公爵様から新しい後見人の件で話を聞きに来るように言われて。それでフォルト様の馬車に一緒に乗せてもらっていたのですが、車輪が壊れちゃって困ってたんですよ。レーナ様の馬車がちょうど同じ街にいるなんてツイてました」
アンナ、ミリー、フォルトがいるせいか、シオンはお行儀よく、天使のような笑みを見せた。

まったくこっちはアンラッキーである。これから不安しかないわ。
どうか、楽しい夏休みになりますようにと、私はＬＵＣＫＹネックレス様を握りしめ、ひっそり祈りを捧げた。
シオンはアンバー領に行くのは初めてだそうで、領内に入ってからそわそわと窓の外を気にしている。会話には入ってくるけれど明らかに上の空だし。
「そろそろだな」
そんなシオンを見ながら、フォルトはにっと白い歯を覗かせて笑う。
「そうですわね。ミリー、窓を開けて差し上げて」
「ええ、もちろん。第一印象が大事ですものね」
アンナが言うと、ミリーはクスッと笑いつつ馬車の窓を開けた。麦わら帽子が飛ばされないよう、両手でしっかりと押さえる。
一体なにが起こるの？
私が興味津々に窓を見ていたことに気づいて、ミリーが場所を変わってくれた。
私とシオンが一緒に外の様子を覗くと、開けた窓から風とともに潮の香りが入ってきた。
「潮の匂い……」

思わず私はそう呟いていた。
「この香りを嗅ぐと、帰ってきたと感じますね」
ミリーは柔らかな顔で微笑む。その目には少しだけ涙が滲（にじ）んでいた。
アンナとフォルトも帰ってきたことを確かめるように、目を閉じ、潮の香りを吸い込んでいる。
私達はたった十三歳で親元を離れ、学園で寮生活をすることになった。
やはり、親元を離れたことによる不安や寂しさは当然あったのだと思う。
ゲームでは夏休み、アンナとミリーだけでアンバー領に帰ることはなかった。
おそらく、帰省するかどうかの選択権は二人にはなく、立場が上のレーナにあったのだと思う。
二人は、常時私をサポートしてくれる。それは有事の際だけではなく、学校の勉強や、私生活でのマナーや振る舞いまで事細かに。
だからこそ、私がレーナと入れ替わった後も、二人のさりげないフォローとやんわりとした指摘のおかげで恥をかくことなく過ごせたのだ。
表立って言わないが、二人はレーナのただの友人としてだけでなく、レーナを補佐する使命を常に感じているのだろう。だから本当は夏休みに自宅に帰りたくても、自分達

からは、はっきりと言えない。
二人は大切な友達なんだし、私が察してあげないと。
そんなことを思っていると、馬車はずっと走っていた林の中を抜け、目の前の景色が一変した。
白く美しい砂浜に透き通る美しい海。海外のリゾート地のような文句のつけようのない見事な海岸線が眼下に広がっていた。
潮の香りがしていたから、海が近いとは思っていたけど……想像していた景色よりずっときれいじゃない！
「なにこれ、すごい！」
先ほどまでのお行儀のよさはどこへやら……シオンは素の言葉遣いで、窓から身を乗り出さんばかりに外を眺めだした。
「シオンたら、そんなにはしゃがなくても」
レーナは一応ここ出身の設定のため、そう言ってシオンを窘めるが……
ぶっちゃけ、私はこの美しすぎる景色にものすごく感動していた。
美しいのは海と砂浜だけではない。海辺の建物も壁は白、屋根は濃い青に統一されていて、まるで一枚の絵のように調和が取れている。

観光客と思われる人々は、美しい景観を眺めながら海岸を優雅に歩く。
私はたった今理解した。
アンバー領、それも私の家があるエリアは屈指の観光地であることを……

あれから馬車を走らせること十分。私はついにレーナの実家に辿り着いた。
馬車が屋敷の大きな門の前に停まると、その扉がゆっくりと開けられる。
門を入ってすぐは玄関ではなく、白色のレンガが埋め込まれた小道。手入れの行き届いた庭や彫刻、噴水を横目に馬車は玄関へと進む。
玄関ポーチの前で馬車を降りると、そこで控えていた執事の手によって、両開きの重厚な造りの扉が開かれた。
現れた広い玄関ホールにずらりと並ぶメイド達が、私が前を通り過ぎるタイミングに合わせて、順番に『おかえりなさいませ、お嬢さま』と頭を下げていく。
玄関は吹き抜けで、天井には空調のためにシーリングファンが回り、バリ風の家具がセンスよく並ぶ。
二階建ての建物だったけれど、サイズがどう見ても民家のそれじゃない。
家の周りも高い塀に囲まれているし。家まで続く小道や噴水……今いる場所も家の玄

関というより、ホテルのエントランスという言葉がぴったりだ。
「おかえりなさいませ、お嬢さま。すぐにクリスティーが参ります。しばらく椅子におかけになってお待ちくださいませ」
執事はそう言って頭を下げると、高そうな椅子に私を案内する。クリスティーって誰？とか聞く余裕はない。
私が着席するとすぐに、控えていたメイドが冷たいおしぼりと飲み物をさっと準備してくれた。
なにこれ……なにこれ、これが家なの？　これがレーナの日常なの？
予約したホテルに実際に着いたら、想像していたよりもずっと高そうなところで、財布の中身が心配になる現象が起きていた。
動揺が顔に出ないように気をつけながらおしぼりで軽く手を拭いて、ほんの少しだけ飲み物をいただく。
美味しいっ……飲み物、クオリティー高すぎ……
飲み物を半分くらい飲んだ頃、お部屋の準備が整いました、と部屋へ案内される。
レーナの部屋は子供部屋だろうし、この豪邸の二階にあるのかしらと思っていたんだけれど……案内されたのは意外なことに、エントランスから少し歩いた一階の一室で

あった。

部屋の前で待機していた若いメイドは、私の姿に気がつくと、一礼して両開きの扉を開けた。

私の視界に最初に飛び込んできたのは、吹き抜けの広いリビングと二階までぶち抜きの大きな窓だった。

窓からはきれいに切り揃えられた芝生と噴水のある庭が見えるし、そのずっと先には、まさかまさかの白い砂浜と透き通った海が広がっていた。

部屋が広いだけじゃない。豪華さが寮の比じゃない。

レーナの部屋にもバリ風のセンスのいい家具が配置されており、外の景色を眺めながらくつろげるようになっている。

窓の外はテラスになっていて、パラソルが置かれている。その下には、白い木製のテーブルと横になれるようなソファまであるときた。

な……なんじゃこりゃぁぁあ！　これが個人の部屋だというの⁉

「おかえりなさいませ、お嬢さま。今、お飲み物をご用意いたしますね。どちらにお持ちいたしましょうか？」

どちらにって、座れる場所がたくさんあるからこその会話だよ、これ。

「外で海を見ながらいただきます」

「かしこまりました」

私の一言で大きな窓が開け放たれ、テラスで準備が進められていく。

ちょっと待って、レーナの部屋の間取りは一体どうなっているの？

天井には玄関同様、シーリングファンが設置されており、簡易キッチンはもちろんのこと、部屋の隅にはバーカウンターまである。

あっ、部屋の中に二階に続く階段がある⁉

被っていた麦わら帽子を脱げば、私の手からすかさずメイドがそれを受け取る。

ゆっくりと、外のテラスに向けて歩く。この窓から見える景色は、私のためだけのものだとすると計り知れない贅沢（ぜいたく）である。

テラスにあるソファに座ると、メイドが華奢（きゃしゃ）なフルートグラスに薄ピンクのドリンクを注いだ。すると、色のついた液体が注がれたことによって、グラスに彫られた繊細な模様が見事に浮かび上がる。

このグラス割ったらヤバそう。これ、一個いくらなのよ。

少しドリンクがぬるいことが残念だけど。

なんなのよこの部屋、素敵過ぎるでしょ。女の子の夢のすべてがこの部屋に詰まって

るわ。

この部屋でパーティー開けちゃうよ……

レーナにとって、この部屋はごく当たり前でしょと言い聞かせて、部屋の中を探索したくてたまらない気持ちをグッと抑える。

じゃないと、はしゃいでソファの上でジャンプしかねないほど、中身は庶民である私のテンションは上がっていた。

「お嬢さま、嬉しそうですね」

気持ちを抑えていたつもりが、思いっきり顔がニマニマしていたらしい。先ほどまでとは違うメイドが、私にそう声をかけた。

「ええ」

ボロが出ないように短く返し、声のした方向に目を向ける。

私の傍に立っていたのは、顔にそばかすのある四十歳前後くらいの体格のいいメイドだった。

「おかえりなさいませ、お嬢さま。メイド一同、お帰りを心待ちにしておりました。至らぬところがあるかもしれませんが、お嬢さまが快適に過ごせるよう善処いたします」

彼女はふくよかな頬を緩め、私に礼をする。

「クリスティー、ありがとう。私も久々に貴方達に会えてとても嬉しいわ」

胸元に名札がついていてよかった。この人が、さっき執事が言っていたクリスティーね。

「もったいないお言葉。着替えのご準備をいたしますので、申し訳ありませんが少々お待ちくださいませ」

クリスティーはもう一度頭を下げると、着替えの準備に取りかかった。

それからクリスティーの手によって着替えさせられると、あっという間に夕食の時刻となった。

今日の夕食は、もちろんレーナの両親と取る予定だ。ゲームに出てくるキャラクターは知っているけれど、レーナの父と母は知らない。

中身が違うことがばれたらどうしようと、緊張しながら私は夕食の席に着いた。

「レーナ、お帰り。お前の帰りをずっと楽しみにしていたんだよ」

私に向かってそう言ったのは、レーナの父親だ。彼はレーナと同じ金髪と緑色の瞳を持った、つり目の人物だった。なるほど、レーナの配色とつり目は父譲(ゆず)りだったのね。

レーナに比較的よく似ている父と違い、彼の隣に座る母は、鮮やかな赤色の髪にはちみつ色の瞳の持ち主で、控えめな性格のようだ。

夕食のテーブルには、シオンとフォルトとおそらくフォルトのご両親もいた。
なんでフォルトの両親だとわかったかというと、だってフォルトのお父さん、フォルトにそっくりなんだもの。
フォルトにそっくりな父親とは対照的に、フォルトの母親は紫色の髪が目を引く、少々きつめの顔立ちの女性だった。紫色の髪は学園でもあまり見たことがないので、とても珍しいのだと思う。
それにしても、フォルトの両親とシオンまでいるだなんて……皆で子供達の帰宅を祝うのかしら？
食事が始まってすぐにレーナの父と母は、グスタフ事件で父が下した判断により、私を危ない目に遭わせてしまったことを深く謝罪してきた。もちろん私はそれを受け入れた。
今回の食事会は、学園で起こったことの聞き取りが目的だったようで、私達は散々聴取された話を再びすることになった。
「レーナ、シオン。私に他になにか言うことはないか？」
緑色の瞳を眇（すが）めた父が、私とシオンを名指しして、最終確認をするかのように尋ねた。
でも、事件の全容は話したと思うし、他に言いたいこと……ってもしかして、私がレーナじゃないってばれた⁉
だらだらと背中を嫌な汗が流れる。
「はい、僕が知り得ていることはすべてお話しいたしました」
「私も特にもう話すことは……」
シオンが頷く横で、ばれたらどうなるんだろうっていう恐怖は、私にあっさり嘘を吐かせた。
「……そうか。フォルトも話してくれてありがとう。まだ十三歳の君達に、酷な話を何度も思い出させてすまないね」
父は教会についてシオンに聞きたいことがまだあるらしい。その後、仕事の合間にいろいろ話をしたいと、シオンにアンバー領に残るよう要請した。シオンがそれを了承しちゃったもんだから、すぐに学園都市に帰らないこと決定！
シオンは夏休みの間、フォルトの家に厄介になることになった。
オワタの顔文字が私の頭の中に浮かんだけれど、こうなってしまったものはしょうがない。こっちはこっちでバカンスを楽しめばいいのである。
食事会が終わり、頭を切り替えるためにもお風呂に入ることにした。

バスタブが大きいのは予想通りだったんだけれど、お湯に花が浮いていてびっくりした。とってもいい香りと喜ぶよりも、掃除はどうするんだろうと考えてしまうあたり、私はお嬢さまになりきれない。

「それでは、おやすみなさいませ、お嬢さま。なにかありましたら、外に控えておりますので気軽にお声掛けください」

入浴後、私の身支度を済ませると、クリスティーをはじめメイド達は早々に下がってしまった。

メイド達に軽く会釈をして、全員が完全に私の部屋から退出したのを見届け……私は部屋の探検を始めた。

なんなのよこの部屋は！　一体どうなっているの。

屋敷の大きさといい、メイドの待遇といい、レーナのお嬢さまレベルを私は完全に舐めていたわ。

まずは一階から部屋を確認していきましょう。

私が今いる広い吹き抜けのリビングでしょ、それにゲストルームらしいベッドルームが一部屋。この部屋にもトイレとお風呂が完備されている。

トイレと広い洗面台、そして先ほど入っていたお風呂。

それに書斎まである。本棚に置いてある本は主に恋愛小説みたいね。

『ニコル・マッカート』の名前がやけにずらりと並んでいるところを見ると、この作者の小説がレーナのお気に入りだったんだろう。

とりあえず一冊持って、と。夏休みの間に全部読み切れるかしら。

次は二階ね。一番気になっていたのよ。子供部屋に二階があるだなんて想像もしていなかったわ。

階段を上ってまず視界に入ったのは、外を眺めることができるように椅子が設置されているスペース。

この椅子に座って夕日が沈む景色を見るのは、さぞかし格別だろう。

寝室には大きな天蓋つきのベッド。寝室に隣接した衣装室は、寮の衣装室の比ではないほど広く、ドレスや小物の量も桁違いだ。

寝室にもリビングほどの大きさではないものの、海が見える窓がついており、窓を少し開けると微かに波の音が聞こえる。

その窓の傍にはテーブルと椅子があって、海の音を聞きながら手紙を書いたり、本を読んだりできそうだ。テーブルの上には、私が夜飲めるように、かんきつ類のスライスが入った水差しとコップが置かれている。

ふと目を滑らせると、水差しの横に薄い青色の手紙が一通置いてあることに気づいた。
「誰からかしら」
差出人の確認をしようと封筒を裏返すと、そこにはジーク・クラエスの文字が……
うまく逃げたつもりだったけど、どこからか私がアンバーに帰ったことを嗅ぎつけたらしい。
まあ、ばれてしまったものはしょうがない。学園都市からアンバーまではかなり距離があるし、まさかわざわざ私に会いに来るようなことはしないだろう。
私は手の中にある封筒をじーっと眺めた。
どうする……開ける？　いや、今は止めておこう、そんな気分ではない。
手紙をテーブルの上に放って、傍にあった椅子に腰かけ、部屋をぐるりと見回す。
一通り部屋を探検し終えた私は、さっきまでのウキウキした気持ちはどこへやら。学園生活という緊張した場から離れたせいもあるのか……すっかりホームシックになってしまっていた。
一学期はいろいろあって考える暇もなく日々が過ぎたけれど、今更ながら私の本当の父と母はどうしているのだろう。レーナの父と母に会ったこともあり、つい気になった。
もう会うことはできないのかな？　そう考えると、とても寂しい。

いや、寂しいなんてもんじゃない。会えるけど会わないのと、どうやっても会えないのでは大違いだ。
悪役令嬢に転生するなんて、長い夢でも見ているのではないかと思ったこともあった。しかし、体験した数々の痛くて怖い出来事が、夢ではないと告げる。
元の世界の私はどうなってしまったのだろう？　私はなんでここにいるのだろう？
昔よく読んでいた異世界転生系の小説を思い出すと、元の世界から異世界に身体ごと転移したり、死んでしまったから別の身体に転生したりという流れが主流だった。
私の身体はどう見てもレーナであり、元の容姿とは似ても似つかない。
レーナになる前の最後の記憶は、地面に突然開いた黒い穴に落ちたことで、それより先が思い出せない。やはり死んだのかな？
私がレーナの皮を被った別人だと知ったら、レーナの父と母、他の皆はどう思うだろう。
私はこれからどうなるのだろうか……ぐるぐるといろんなことを考えてしまう。
でも、ジークがレーナのことを認識していないと知った時に、私の意思とは関係なく涙が溢れた。それはやはり、私の中にレーナがいるからなの？
「……っ」
これ以上このことを考えるのは止めだ！

そうじゃないと、いい歳をして親に会えないことで泣いちゃいそう。
もう寝ようとベッドに向かおうとしたところで、先ほどのジークからの手紙が再び目に入った。
どうせいずれ読まなきゃいけないんだから。気分を変えるためにも、やっぱり読んでみよう。
私はテーブルの上に置かれた封筒を手に取り、中から便箋を取り出した。
手紙には、アンバーに帰っているのだろうか？　ということと、いかがお過ごしですか？　ということが丁寧に、きれいな文字で書かれている。
結論。中身のない手紙だった。
イラッとした私は、返事を出さないことに決めた。
翌朝、昨晩はなかなか寝付けなかったため、遅めの朝食を取っていると、母にエステへ行くわよ！　と連れ出された。
保湿成分に優れた泥を全身に塗りたくられ、お昼はエビ、カニ、ウニ、オイスターのシーフード三昧で、のんびりゆったり美味しい時を過ごした。
夜、寝室のテーブルを見ると、手紙が新たに二通置いてあった。
一通は昨日と同じ薄い青色の封筒で、裏を見ると案の定ジークの名前がある。

まさか返事も書かないうちに二通目が来ると思わなかったので、驚きつつ、残されたもう一通を掴んだ。
手紙はフォルトからだった。
内容は、先日馬車に相乗りさせてもらったお礼と、二週間後、シオンも誘って五人で美味しい店にランチを食べに行きませんか？　というものだった。
どうやら律儀に約束を守り、ご飯に連れていってくれるらしい。
ずいぶんと日にちが空くけれど、シオンもフォルトも事件についてまだ両親と話すことがあって忙しいのかもしれない。
ジークの手紙は結局開けなかった。だってきっと、また中身なさそうだし。
フォルトの手紙だけ、楽しみにしていますってメイドに代筆を頼んだ。
私のバカンスは予想外のトラブルもあったけれど、まずまずの滑り出しだった。

アンバーに帰ってきてすぐ、私は父と母にダンスを練習したいと頼んでいた。そして数日後の今日、さっそくやってきたダンスの先生を見て、私は固まった。
百八十センチはあるだろう長身に、すらりと長い手足。ほどよく筋肉がついていて、顔は当たり前のごとく小さく、まるでモデルや俳優のような男性が目の前に立っている

のだ。固まってしまうのも無理はない。

「初めまして、レーナ様。公爵様よりダンス講師として雇われました、リオンと申します。短い期間ですがよろしくお願いいたします」

リオン先生は緑の瞳で私のことをじーっと見つめながら挨拶をすると、深く頭を下げた。

先生の動きに合わせて、彼の長い深緑色の髪がさらりと流れ落ちる。顔を上げると、先生は掛けている眼鏡の位置と髪をサッと整えた。その何気ない動作も、イケメンがやると様になり、私はごくりと生唾を呑み込んだ。

ダンスの先生を頼んだら、こんなのが来るとか想定しないでしょ!?

公爵家の力はこんなところでも発揮されるのか……

イケメンキター！　と思わず心の中でガッツポーズしてしまったわ。そのくらい当たりが現れたのである。

先生イケメン……尊いっ、と考えながら私は先生とホールドを組む。先生の教え方がうまいのか、わりとすぐにそれなりに踊れるようになった。

「レーナ様は筋がいい。これなら、すぐ私のレッスンは必要なくなりそうですね」

先生が切れ長の目をすっと細めて、褒めてくれる。

少しの練習だけで、ダンスが得意でもなかった私がこんなにスムーズに踊れるのかと違和感を抱く。もしかしたら私の中にレーナとしての記憶が実はあるの？　とかいろいろ考えていたんだけれど……

なんとなく今は深く考えたくなくて、先生に止められるまでたくさん踊ったのだった。

ジークからの手紙は、私が返事を出さないにもかかわらず毎日届いた。

私達は政略結婚をするのだ。ジークにしたら、自分の失態が原因で婚約が解消されては困るから、このような手に出ているのだと思う。

開けられることなく放置されている手紙を、メイド達が気にしているのがわかる。けれど、そこはできたメイド。誰もなにも言わない。

しかし、私は五通溜まったところで観念して順番に開けることにした。

五通とも季節の挨拶から始まり、元気か？　変わりないか？　こちらは元気です。最近、こんなことをしています、といった風なことが書かれていた。

これまでろくにレーナに手紙なんて出したことがないものだから、まるで会話がない思春期の娘に、父親が話しかけているような内容でクスっとしてしまう。

私とジークの婚約は、政略的なメリットがあるはず。だからこそ、私としてもいつま

でも彼を無下にするわけにもいかない。
流石に返事、書いたほうがいいよね……どうしよう。
私はここ最近悩み、そして悟っていた。
おそらく、もう元の世界には帰れない。
ふとした瞬間に、会えなくなって久しい本当の親や兄弟、友達の顔が次々と脳裏に浮かび、じわりと目の前が涙で霞む。
レーナになって、私は結局これからどうするの？
そんなことが頭の中をグルグル回っていた。
だから、つい書いてしまったのだ。
『レーナ』にとって特別な彼に、『会いたい』とただ一言書いた手紙を。
物語のヒーローである彼なら、悪役令嬢である私のこともなんとかしてくれるのではないか。私をこの苦しさから救いだしてくれるのではないかと思って。
手紙に封をしてテーブルの上に置き、私は眠りについた。

朝起きると、昨夜のテンションはすっかり冷めていた。ジークはヒロインのヒーローで、私を断罪する側なのだから救うもなにもないわ。

あの手紙は破棄して、適当にアンバー楽しいですって書き直そう。
そう思ってテーブルの上を見た私は、息を呑んだ。
「嘘でしょ……」
昨夜書いた手紙が、テーブルの上から消えてしまっていたのである。
慌ててメイドに確認をすれば……
「封がしてあったので、朝早馬で出しました。ジーク様もお待ちかと思いましたので」
無情にもそう言われてしまった。
まずい。あの深夜のテンションで書いたＳＯＳの手紙が……ジークに届く。
せっかく平穏な夏休みを送るために、わざわざ領地に帰ってきてまでジークと接触しないようにしていたのに……
学園には今、悪役令嬢レーナという邪魔者がいない。転生してすぐに、ヒロインとジークがある程度親密になっていないと発生しない、レーナのヒロイン虐めイベントが起きたくらいだ。
邪魔者がいなくなった学園では、さぞかしジークとヒロインの仲が進展していることだろう。
頭の中で、『やっぱりレーナはジークに気があることがわかる手紙が届く→ヒロイン

との恋の障害に→レーナ断罪！』という展開が、ミニキャラによって再現された。
ヤバイ。下手したら、これまでジークを避けに避けて、避けまくった私の苦労が水の泡になる。
手紙をジークに読まれるのを、なんとしても阻止しなければ！
メイドは私の表情を見て、出すつもりのなかった手紙を出してしまったことを悟ったらしい。青い顔になりながら、謝罪の言葉を繰り返す。
「も、申し訳ございません……！」
「いいえ。私が紛らわしいところに、それらしく置いていたのが悪かったのです」
私は大人の対応で、泣きそうなメイドをフォローする。
そこにクリスティーが現れ、手紙を出してしまったメイドともう一度深く頭を下げた。
「お嬢さま」
頭を上げたクリスティーが毅然とした態度で口を開いた。彼女は他のメイドに比べて、失礼だけど少々年を重ねている。
年の功なのか、慌てることなくどっしりとした態度に、なぜか私のほうが緊張してしまう。
「はい！」

「私どもの不手際でご迷惑をおかけして本当に申し訳ないのですが、こういったことは公爵様に相談されるのが一番よろしいかと思います」
流石大御所。どうすればなんとかできるかをアドバイスしてきた。
私はそれに頷くと、即行部屋を後にして、父のもとへと走り出す。
「お父様ぁあああ！」
「おやおや、今日のレーナは元気いっぱいだね。まるで太陽のようだ」
書斎にいたお父様は、私のテンションを見事にスルーする。
涼しい顔で流せるくらいの度量があるから、アーヴァイン家を背負えるのかもしれない。
「お父様。今朝出ていった早馬に追いつくには、どうしたらいいと思いますか？」
「うーん。追いつくのはレーナの乗馬の腕では無理だな」
「やはり……」
返事は無情だった。
落ち込む私に、お父様は不思議そうな表情で尋ねる。
「早馬に追いついてどうするつもりなんだい？」
「手紙を間違えて渡してしまって。どうしても相手に読まれたくないのです」

「なるほど、レーナが行きたいわけではないんだな。手紙か……うーん」
お父様はしばらく考え込んだ後、ポンッと手を叩いた。
「もう一通手紙を書きなさい」
「手紙ですか？」
「そうだ。一通目の手紙を運んでいる馬と騎手より優れた者に二通目を託して、先に届けてもらいなさい。後から届く手紙は間違いなので、読まずに送り返してほしいと書いたらどうだい？」
「なるほど！　流石お父様」
私は父の部屋にあった紙を拝借し、サラサラと一通目は読むなと書いて、控えていたメイドにそれを託した。
どうか読まれませんように。頼んだわよ、本当に頼んだわよと彼女の後ろ姿を見送る。
手紙のことが気になってソワソワとしてしまう。
しかし、私がソワソワしていると、やらかしたメイドがとても小さくなるものだから、気分を少し変えるために近所を散歩することにした。
護衛が私の一メートルほど後ろをついてくるけれど、家にいて平気なふりを続けるよりかは大分マシだ。

浜辺の白い砂が美しく、海はどこまでも青く澄み渡っている。しかし、このロケーションを前にしているにもかかわらず私のテンションは低い。
あの手紙がきっかけとなって、ゲームシナリオ通り断罪ルートになったらどうしよう……
ジークといい関係になりたいとは思わない。ただ、社交界的に死にたくないだけなのだ。
ショッピングでもして気を紛らせようと、海岸沿いから高級なショップが並ぶ通りへと足を運ぶ。
すると、遠くにアンナとミリーが二人で楽しそうに買い物をしているのを見つけた。
「――っ！」
二人のキャッキャッとした様子を見て、思わず物陰に隠れてしまう。
……私、誘われてない。
アンナとミリーは私のことを『レーナ様』と呼ぶ。
でも、二人はお互いを呼び捨てにしていた。
二人は友達でも、私は二人にとって友達ではない。そんな言葉が一瞬頭を過る。
二人はいつだってレーナの隣にいて、どこまでも私の味方だった。ゲームでヒロインを虐める時も、夏休みに家に帰らない選択をした時も傍にいた。

しかし、二人は公爵令嬢レーナのご学友であっても、本当の友達ではなかったのかもしれない。

私は彼女達に見つかる前に、来た道を慌てて引き返す。

「いかがなさいました？」

護衛の男が突然の私のUターンに何事かと問う。それにうまく答えられないまま、私はずんずんと突き進む。

今日はなんて日なのだろう。

ジークに手紙を送ったこともだけど、そんなことよりも、アンナとミリーが私抜きで楽しそうに遊んでいる姿が精神的に一番きた。悲しくて、自然と目線が地面に下がっていく。

「ごきげんよう、レーナ嬢」

その時、急に声をかけられ、私ははっとして立ち止まった。

「あっ、フォルト……ごきげんよう」

顔を上げると、目の前にはフォルトが立っていた。フォルトも少しは関係が回復したとはいえ、レーナのことをよく思っていない人物の一人だ。

「顔色が悪いけど……なにかあったのか？」

心配そうな表情で私の顔を覗き込むフォルト。そんな彼の目線から逃れるように、私はふいっと顔を逸らした。

「いえ、なにも」

「……そうか。暇なら付き合ってくれ」

フォルトは少しの間じっとこちらを見た後、急に私の手を引いた。

「ちょっと、フォルト！　どこに行くの？」

目を丸くする私の手をぎゅっと握り直し、フォルトは一軒のカフェに足を踏み入れた。すかさず店員がやってきて、私達を見晴らしのいい席に案内する。お互いの護衛が少し離れた席に座ったのを確認すると、フォルトは店員になにやら注文した。

しばらくして、私とフォルトの前には美味しそうなパンケーキが置かれた。

「一人じゃ入りにくいから助かった」

そう言って、フォルトは目を細めて私に微笑んだ。

きっと私が暗い顔をしているのを見て、わざわざここに連れてきてくれたんだろう。本当は私のことをよく思ってないだろうに……気を使わせちゃったな。

フォルトはすぐにパンケーキをフォークで切り分け、口に運ぶ。美味しいのだろう、わかりやすく頬を緩ませるのが可愛らしい。

たっぷりの生クリームもバナナもイチゴもマンゴーも、あっという間にフォルトは平らげていく。
本当に甘い物が好きなんだなぁ。
「どうした？　口に合わなかったか？」
フォルトの食べっぷりを見るばかりで、あまり食べていない私にフォルトが声をかけた。
「とっても美味しいから大事に食べているのです。ねぇ、フォルト……」
「なんだよ、改まって……」
私がフォークをテーブルの上に置き、神妙な面持ちでフォルトを見つめると、彼はあからさまに嫌な顔をした。
「私達、今からでも友達になれないかしら」
「はぁ？」
フォルトの眉間に皺が寄る。
フォルトは優しいから、なんだかんだ言って私が頼めば断わらないのではと思ったのだ。だが、彼は難しい顔をして黙ったままだ。
怒らせただろうか。優しいからといって、流石に図々しいお願いだったかも。でも友

達ゼロという現実が辛すぎたの。
「あの、今のはなしで」
沈黙に耐えきれずそう告げて、私はいそいそとパンケーキを口に運ぶ。
「あーっと、友達、な。今からな……」
フォルトは左手で髪をグシャグシャとかいて、顔を隠すように横に向けた。
「――っ！　はい！」
どうやら友達になってくれるみたいだ。嬉しくなって私は勢いよく返事をする。
私の笑顔を苦笑ぎみに見ていたフォルトは、すっと真剣な表情になった。
「なぁ、レーナ嬢……」
「どうかしました？　おかわりなら、次はこっちがいいんじゃないかしら」
メニューを差し出し、次はもう少し軽めのデザートでどうかと指を差す。
「いや、そうじゃなくてだな。……グスタフの件、怪我はもう大丈夫か？　本当にその、悪かった。今までのことをすべて水に流すのは無理かもしれないが……すまないっ」
フォルトは歯切れ悪く告げて、頭を下げた。
「私の部屋にお見舞いに来てくれた時、十分謝ってもらったわ。これ以上はもうなし。友達になったのでしょ」

立ち読みサンプルはここまで